



ゆめ通信

2020.1.1. No.108

発行 日本養豚事業協同組合

〒104-0033 東京都中央区新川2-1-10
八重洲早川第2ビル6階

TEL.03-6262-8990 FAX.03-6262-8991

新年のご挨拶

日本養豚事業協同組合
理事長 松村 昌雄

明けましておめでとうございます。

一年を省みますと、未だかつてない大変な年となりました。二年前の9月に突然やってきたCSFにより生産現場は混乱と先の見えない時間を費やし、多くの犠牲を出してしまいました。私の住む埼玉県でも五軒の農家で発生を許してしまい、ワクチンの接種県となりました。今後は全養豚家がワクチンのないASF対策を頭に入れつつ、更なる飼養衛生管理のレベルアップを目指さなければなりません。ASFは、中国を始めほぼアジア一帯に広がってしまいました。何としても国内侵入を食い止めなければ業界が立ち行かなくなります。当分の間は気の休まることのない経営が続きます。CSFの脅威については、ワクチン接種の道が拓かれたので、清浄化が図られるまでは接種が続くものの、効果的な経口ワクチンの散布によってこれ以上の野生イノシシ陽性拡大を防ぐ事が出来れば徐々に先が見えてくるのではないのでしょうか。隣接県でのワクチン接種が不可能であることや接種された豚の移動制限等、苦しい中での経営を続けなければなりません。今後行政には海外で開発されたマーカーワクチン等を検討していただき、従来通りの豚の流通が何とかできるように豚事協としても取り組んでいかねばならないと思っています。

豚事協では事務所スタッフが二名替わり、組合員は昨年比10名増となり440名となりました。組合の決算内容は前年を少し下回りましたが、満足できる内容でした。中部地域でのCSF発生により多くの仲間の農場が殺処分となり、今期決算は厳しいものになると考えておりましたが、皆様方のご協力により飼

料は月間1万トンを超え、共同購入事業も順調に推移し、前年に近い決算となりました。

昨年はTPP元年といえるスタートの年でありましたが、まずまずの豚価に恵まれ多くの組合員が前年並みの決算になったことと思います。しかしながら、一人当たりの豚肉消費量は伸びてはいても、伸びた分だけ輸入豚肉に奪われてしまっているのではないかと思います。一月からの輸入量は月間8万トンを超えています。その原因はアジアでのASFの広がりを見越しての海外市場での早目の豚肉調達なのかどうかは不明なところではありますが、年間百万トンを超えそうな勢いは恐怖となり、今後の勝ち残りのために豚事協の役割はさらに重要になると思われます。

昨年から新事業として始めた養豚総合保険は今後益々必要になってくるでしょう。昨年の台風による局所的大被害を見ても備えは必要です。現在数件の契約が成立しています。被害は火災のみでは済まなくなっているのが現状です。

米国との貿易協定のスタートやTPP11三年目、EUとの合意二年目などに加え、国内外の疾病問題など養豚業界は大変な状況ではありますが、昨年同様全国7ヶ所で行う支部セミナーは更に充実した内容を企画し、多くの組合員の皆様の参加をお待ちしております。三年目を迎えた飼料品質研究会もメンバーが増え、より地域性をも加味して豚の栄養要求量に対応できる良品質のものを考えてもらいます。組合の運営には組合員の皆様の意見もいただきながら、みんなで令和の時代を頑張っていきましょう。

九州支部セミナー開催

10月11日、熊本市にて九州支部セミナーを開催し、77名が参加しました。10月12日に関東に上陸した台風19号の影響で、翌日関東・関西へ帰る予定の参加者にとってはヒヤヒヤものの開催でした。

13時より恒例の理事長対話を開始。静岡県CSFワクチン接種により精液や種豚は非接種県には販売できなくなってしまうこともあり、優秀な遺伝子の確保に話題が集中しました。メンデルジャパンが東北への移転を進めていると説明しましたが“メンデルの努力には感謝するが、九州は配送日数が1日長いので近いところにも欲しい”との要望が出ました。

セミナーは、今期取り扱いを開始した損害保険の説明から開始。丸紅セーフネット社の阿部啓介氏より次の説明がなされました。

- ① 養豚に絞ったことで、様々な飼育環境におけるリスクを広くカバーできるようにした。
- ② 保証パターンを選ぶことにより農場に応じた保険をセットできる。
- ③ オプションを選ぶことによって通常では保証されない事故に対する対応も可能にした。

各種の保険会社から、最も適した商品を選び出して組み合わせ販売することの有利性を強調されていました。

セミナーの主題である“PRRSなどの慢性疾患から農場を守って経営を維持していく実践例”に関しては、(有)松村牧場の専務取締役である松村淳氏より「病気と闘わない養豚経営のための衛生管理の徹底とは」と題して講演していただきました。

当農場はもともとPRRSは侵入させていなかったこと。PRRSを侵入させないために、様々な防疫措置をとっていることを説明されました。特筆すべきは、①出荷のトラックは水洗消毒は当然のことながら1日1回以上は絶対に屠場を往復させない、②通勤者は農場のシャワールームに到達する前の時点で既にサンダルに履き替えてから農場に近づくようにしている、③農場の中でもシャワーインのあと、農場内の移動に関しては、踏み込み消毒槽に靴を浸したあ

と、別の靴に履き替えて豚舎内に入場する、④余程専門的な工事ではない限り業者は畜舎内に入れない、⑤獣医師など、外部からの訪問者は契約コンサルタントのサミットベテリナリーサービス以外の獣医師は入場させないなど、これは社長（理事長）の拘りでもあるが、衛生管理は徹底しているとのことでした。

この衛生管理に関しては次に講演した平田先生が「日本の中小養豚家でこれほど徹底した衛生管理を実践している農場があるとは知らなかった、認識を新たにしました」と脱帽していたのが印象的でした。組合員の皆さんも防疫管理は全て自分の身に帰ってきますので“できない”と思わず、徹底してください。徹底してしすぎることはありません。現実にてきている農場が沢山あるのですから。

次に講演をお願いしたのは、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（略称：農研機構）中央農業研究センター虫・鳥獣害研究領域鳥獣害グループ上級研究員で、日本に3人しかいないイノシシの研究者の一人、平田滋樹氏に「イノシシの生態と疾病防御について」お話を伺いました。時節柄イノシシの生態研究結果の勉強は必須で、皆さん真剣でした。

イノシシの歴史から始まって、食性（草食を主体とした雑食）・繁殖などの特徴が詳細に説明されました。豚も植物繊維からエネルギーを接種することが確認されていますが、イノシシは豚の先祖なので当たり前かなるほどと思いました。また、“鳥獣害対策”として総合的に判断しなければ間違えてしまう、基本は総合的な畜舎や畜舎周辺の衛生管理だ“と強調されていました。

防護柵の設置方法やネット、電気柵の設置など、ハードの面での防御方法の説明の中で『結局は集落全体で鳥獣害対策に取り組んでもらわなければならない、養豚場だけが防御設備を強化してもとても難しいです』と言いながらも、“それでも被害を受けるのは養豚場なのだから防疫対策はしっかりしてください”とのことでした。（矢嶋）

沖縄支部セミナー開催

11月15日に沖縄県畜産振興公社（那覇市）にて沖縄支部セミナーを開催し、沖縄としては未曾有の63名が参加しました。台風が多い沖縄であり25・26号が発生していましたが、フィリピンの北や小笠原諸島のはるか南にあって、九州支部のときのように心配する必要はありませんでした。沖縄支部でも、組合員と理事長の対話集会を午後3時より開催予定でした。しかしながら、組合員が集まってきたのは午後3時半を過ぎてしまっており、盛り上がりには欠ける対話集会となりました。セミナーは16時より開催。CSF感染イノシシが沖縄まで泳いでいくことはなかろうとのことで、沖縄ではイノシシの先生の講演はありませんでした。

最初の講演は（有）コマクサファームの代表取締役社長の遠藤勝哉氏による「建物を使った成績改善について」と題して話されました。氏が社長についてからのコマクサファームの成績改善には目覚ましいものがあります。2009年の3サイト移行までは日本の平均以下だった母豚1頭当たりの出荷頭数が2010年には20頭を超え、2017年には28頭弱まで増加していました。農場FCも2005年の4.1から2017年には2.87まで、とんでもなく改善しています。この改善は3サイトにして離乳期子豚や肥育期子豚への疾病の感染を最小限に抑えることができたのが最大の原因と説明されたいました。種豚（ダンプレッド）も影響してはいるが出荷先のイオンがLWDの肉豚を欲しがったのでダンプレッドを導入したということで、特に成績改善に意識したわけではないが、種豚を変更して成績が改善したのも確かなようです。しかし尾齧りや耳齧りが多く、結構神経質な豚だということでした。

今は40億の借金をして畜舎の増設をし、母豚1,500から3,000頭の一貫生産に拡大中であるとのことでした。SEW（早期離乳）なども視野に入れ、母豚からの垂直感染を抑え込むことにより、より安定した肥育システムを目指しているとのこと。“大規模農場からできる”とは思わず、養豚業は補助金なしで40

億もの借金ができる産業なのだという風に捉えていただきたいものです。“やればできる”というより、“企業として可能である”ということをも身をもって示されているのだと思います。沖縄の人たちに勇気を与えられたと思います。講演では“破れかぶれ”のような話し方をなされていましたが、しっかりと数値に裏付けられた経営計画を立てているのがよく伝わってきました。

続いて（有）サミットベテリナリーサービスの代表取締役の石川弘道獣医師に「システム養豚への移行による疾病対策～その留意点および方策について～」と題して講演していただきました。石川先生は前の講演でお話いただいた遠藤社長に（3サイトシステムなど）経営基盤を確実にできる手法を提案し、養豚経営の大型化に踏み出すきっかけを与えた人です。システム養豚の手法を取り入れるなどして母豚からの疾病の垂直感染を抑え込むことの重要性を養豚家に認識させ、病気と闘わない養豚を啓もうされてきています。沖縄でもその大切さや2-10、3-7などの導入手順について詳細に説明されました。後半ではCSFが岐阜や愛知で猛威をふるった時に、現地の農場に立ち入り調査した時の経験談を開示されました。衣服や長靴の交換の重要性、車両消毒の実施方法など、CSFやASFに備えて、養豚家が熟知しておかなければならない内容が込められていました。とくにASFにはワクチンはありませんので、衛生管理を確実にして農場へのウイルス侵入を阻止せざるをえません。

石川先生をはじめとした獣医の先生方が得られてきた知識を、組合員をはじめとした養豚家に教示いただいて、CSFやASFだけでなく、様々な疾病の農場への侵入を阻止していただきたいと思います。衛生管理に“これで良い”という終わりはないと思います。“そんな面倒なことはできない”と考えるのではなく“疾病侵入阻止のためには可能な限りの対策をする”と前向きに捉えていただきたいと思います。（矢嶋）

Topics

豚増殖性腸炎はどんな病気？

ベーリンガーインゲルハイムアニマルヘルスジャパン株式会社
遠藤 結

はじめに

豚増殖性腸炎と聞いて、どんなことが思い浮かぶでしょうか？肥育で問題となる下痢の原因の1つでしょうか？うちの農場では問題のない病気だと思われるでしょうか？豚増殖性腸炎、PPE、ローソニア感染症など様々な呼ばれ方がありますが、これらはすべてローソニア イントラセルラリスという細菌により引き起こされる同じ病気を意味します。本稿では、まだ未解明な点が多数残されている豚増殖性腸炎がどんな病気なのか掘り下げていきたいと思えます。

豚増殖性腸炎と原因菌

豚増殖性腸炎は、ゴムホース状に肥厚した腸管を特徴とする「腸腺腫症」という病名で1931年に初めて報告されました¹⁾。その後、1974年に腸管の細胞に寄生している細菌が発見され、この疾病の原因菌であると報告されましたが²⁾、この細菌の培養に成功したのは20年近く経った1993年のことでした(写真1)。こんなにも時間がかかった理由は、この細菌の培養の難しさにありました。

細菌の多くは人工的な培地で培養することができ

ますが、ローソニアを増殖させるには活発に分裂する細胞が必要です。それだけではなく、ローソニアは通常の空気条件下(窒素78%、酸素21%、二酸化炭素0.04%)では増殖することができません。窒素83.2%、二酸化炭素8.8%、酸素8.0%という特殊な条件が必要です³⁾。ローソニア イントラセルラリスと命名されたのは、長きに渡る試行錯誤の末、この特殊な条件を見つけ、初めて培養に成功した英国エジンバラ大学の細菌学者であるゴードン・ローソン博士(写真2)の偉業が称えられてのものです。“イントラセルラリス”は、この菌の寄生部位が腸管の“細胞内”であることに由来します⁴⁾。

ローソン博士が培養条件を確立して25年以上が経過した現在でも、ローソニアの培養は非常に難しく、分離された菌株数は世界中の菌株すべて合わせても25株に満たないそうです。つまり1年に1株分離するのがやっとなのです。培養がそんなに難しいのであれば、豚の体外ではすぐに死んでしまう弱い細菌のように思われるかもしれませんが、ローソニアは糞便中では少なくとも2週間は感染力を持つとされています。国内の農場のローソニアの抗体保有率の調査では、検査を実施した全国の378農場の96%に

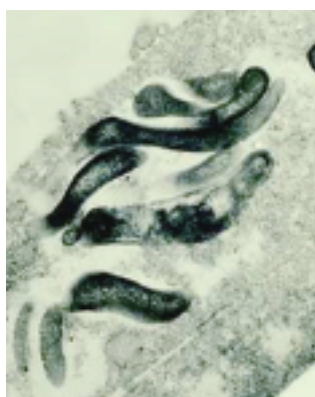


写真1 腸管細胞内のローソニア
(Lawson GHK et al., 1993)



写真2 ゴードン・ローソン博士
(Smith G et al., 2018)

当たる362農場が抗体を保有していました⁵⁾。また、九州地区で実施した同様の調査では、検査した96農場の抗体保有率は100%で、健全な出荷豚1,362頭のうち、82%に当たる1,119頭が抗体を保有していました⁶⁾。抗体を保有しているとは、その豚にローソニアの感染歴があることを示しています。つまり、ローソニアは国内のほぼすべての農場に浸潤している常在菌なのです。

目立たなくても大きな被害

豚増殖性腸炎には大きく分けて病型が3つあります（図1）。1つは4～6ヶ月齢の肉豚や繁殖候補豚に発症し、出血性下痢を呈して死亡する急性型です。もう1つは離乳以降から肥育後期の肉豚に多く見られ、下痢や軟便を主徴とする慢性型です。さらに、下痢のような便の異常はないのに増体など肥育成績が悪化する不顕性感染型と呼ばれる病型があります。

近年、急性型の発生は減りつつあり、慢性型や不顕性型が農場の生産性に多大な悪影響を及ぼしていると言われています⁶⁾。慢性型は他の原因による下痢や軟便などの症状との区別が難しく、また不顕性感染型の場合は症状が目に見えないため、豚増殖性腸炎は気付かないまま成績を悪化させている恐ろしい病気であると考えられます。実際に、豚増殖性腸炎は世界の養豚産業において経済性に影響を与える最も重要な疾病の1つであると言われており⁷⁾、1日平均増体量が31%減少するとの報告もあります⁸⁾。では、下痢の症状がない場合でも生産成績が悪化するのなぜなのでしょう？

食べた飼料がムダになってしまう病気

豚増殖性腸炎は、腸管がゴムホース状に肥厚するのが特徴です（写真3）。正常な腸管（写真4）と比較すると、その差は明らかです。豚流行性下痢（PED）

の場合、PEDウイルスは小腸の上皮細胞で増殖し、細胞を壊死（えし）させてしまいます。PED発症豚の腸壁が内容物が透けて見えるくらい薄くなるのはそのためです。豚は消化吸収ができなくなり、下痢が起こります。

ローソニアが腸管の上皮細胞で増殖しても、PEDのように壊死したり、破壊されたりすることはありません。その代わりに、ローソニアに感染した腸管上皮細胞は異常な増殖を始めます。こうしてできた細胞は正常に発達することができず、栄養素の吸収という重要な役割を果たすことができません。もっと詳しく説明すると、アミノ酸、ビタミン、グルコースなどの栄養素は、腸管上皮細胞の表面にある「輸送体」によって細胞内に吸収され、豚が発育するために使われる栄養となりますが、ローソニアに感染して増えた未熟な細胞には、このような栄養素の「輸送体」が存在しないのです⁹⁾。ローソニアは、腸管の

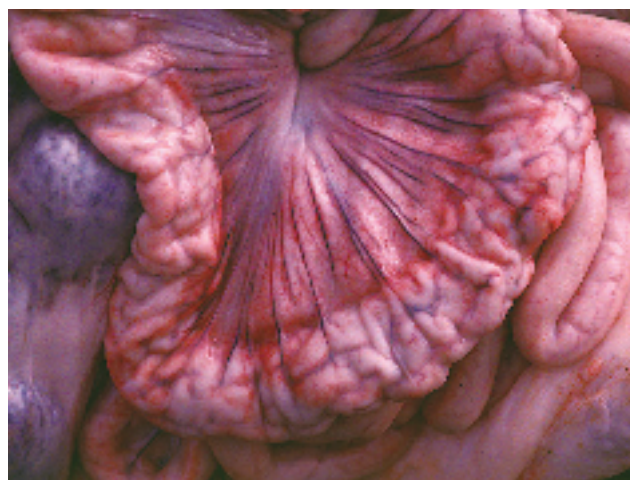


写真3 ローソニア感染で肥厚した腸管
(ベーリンガーインゲルハイム社)



写真4 正常な腸管
(ベーリンガーインゲルハイム社)

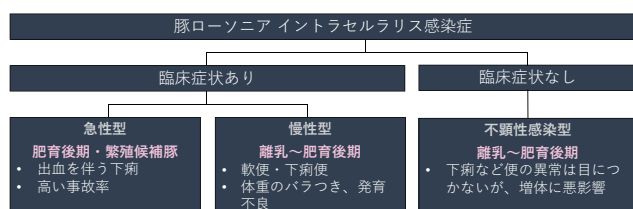


図1 豚増殖性腸炎の分類

上皮細胞を栄養素の吸収ができない未熟な細胞のまま、次々に分裂、増殖させるため、腸管が肥厚します。豚が飼料を食べても栄養素が吸収されず、発育不良が起こってしまうのが豚増殖性腸炎の正体なのです。

被害を軽減するために

前述のとおり、ローソニアは国内のほぼすべての農場に浸潤しているため、撲滅ではなくコントロールを念頭においた対策を行います。実験感染では、約100万個のローソニアを豚に経口的に接種すると、豚増殖性腸炎の病変が再現されます¹⁰⁾。感染豚は、多いときは糞便1g中に1億個もの菌を排泄すると言われているので、ごく少量の糞便でも感染源になり得ます。また、感染する菌の数が多いほど病変が重篤になることも分かっていますので、いかに感染する菌量を少なくさせるかがポイントです。そのため、豚舎の洗浄、消毒は非常に重要です。

ローソニアには、マクロライド系、リンコマイシン、チアムリンなどの薬剤が有効です。農場では他の疾病との混合感染が認められることが多いため、農場ごとに症状に合う適切な薬剤プログラムが必要です。また、2011年から経口投与の弱毒生ワクチンが販売されています。アメリカではワクチンの投与率が50%を超えており、ローソニア対策はワクチンで行うのが一般的です。日本国内でも抗生物質の適正使用や持続可能な養豚を目指す風潮から、この数年でワクチンの投与率が約10%まで伸びています。

最後に

ローソニアの培養に初めて成功したローソン博士は2018年に逝去され、昨年9月にローソン博士の功績を記念したローソニアについてのシンポジウムが英国で開催されたので、私も参加してきました。世界中からローソニア研究の権威が一堂に会し、最新の知見が報告される一方で、ローソニアに感染した腸管では、なぜ未熟な細胞が増えるのかなど、ローソニアに関する多くの謎が共有される場ともなりました。今後、研究が前進したら、また皆様にご報告したいと思います。最後までお読みいただき、ありがとうございました。

参考文献

- 1) Biester HE *et al.*, American Journal of Pathology, 7, 175-185, 1931, Intestinal adenoma in swine
- 2) Lawson GHK *et al.*, Research in Veterinary Science, 17, 331-336, 1974, Intestinal adenomatosis in the pig: a bacteriological study
- 3) Lawson GHK *et al.*, Journal of Clinical Microbiology, May 1993, p. 1136-1142, Intracellular Bacteria of Porcine Proliferative Enteropathy: Cultivation and Maintenance in vitro
- 4) McOrist S *et al.*, International Journal of Systematic Bacteriology, 820-825, Oct., 1995, Characterization of *Lawsonia intracellularis* gen. nov., sp. nov., the obligately intracellular bacterium of Porcine Proliferative Enteropathy
- 5) 矢原芳博、臨床獣医, 22 (1)、13-16、2004、特集 豚増殖性腸炎 日本における浸潤状況
- 6) 末吉益雄、平田あゆみ、月刊養豚界、46 (4): 66-67、2011、見えない敵「ローソニア」を斬る！知られていないPPEの現状
- 7) Lawson GHK *et al.*, Journal of Comparative Pathology, 122, 77-100, 2000, Proliferative enteropathy
- 8) McOrist S *et al.*, 1997, Veterinary Record 140, 579-581, Estimate of direct financial losses due to porcine proliferative enteropathy
- 9) Vannucci FA, Gebhart CJ, Veterinary Pathology, 2014 Mar; 51 (2): 465-77, Recent advances in understanding the pathogenesis of *Lawsonia intracellularis* infections
- 10) Smith SH, McOrist S, Research in Veterinary Science, 1997, 62: 6-10. Development of persistent intestinal infection and excretion of *Lawsonia intracellularis* by piglets

志澤勝氏・旭日小綬章受章

2019年秋の叙勲で、志澤勝氏（顧問理事・神奈川県・（有）ブライトピック）が旭日小綬章を受章されました。

人格・識見共に優れ、豊富な経験・知識と卓越した手腕をもって、自ら営む養豚業を発展させるとともに、県域や全国の養豚団体の会長等を務め、その優れた指導力を発揮して我が国の養豚業全体の発展・安定に弛まぬ努力を続けてきたこと、経営技術に研鑽努力を重ね、廃棄される予定の食品を飼料とすることで、飼料代を低下させ、食品リサイクルの推進にもつながるリキッドフィーディングシステム導入のように自らリスクを負って新たな分野にチャレンジした際にもシステムを軌道に乗せ、事業拡大に成功し、社会的役割を果たしてきたことなどが評価されました。

志澤氏は2011年に黄綬褒章を受章されています。



志澤ご夫妻

五十嵐一春氏・黄綬褒章受章

2019年秋の褒章で五十嵐一春氏（山形県・組合員・（株）五十嵐ファーム）が黄綬褒章を受章されました。

循環型農業を志向し、養豚経営で発生する堆肥及び液肥をアスパラガス栽培、水稻栽培に有効に活用し循環型農業を実践していること、養豚で2名、アスパラガス栽培で13名を地域から雇用し地域に雇用の場を創出していること、生産された豚肉は「あつみ豚」、「桜美豚」としてアスパラガスとともに地域食材として定着し観光振興にも貢献していること、多産系の種豚を導入し高い生産成績を達成したことやベンチマーキングの解析結果に基づき自身の経営を客観視し経営改善に努めたことなどが評価されました。



五十嵐ご夫妻

Dr. 伊東の
ランダム
シンキング

第15回 新年を迎えて今の世相に関する 徒然なる思い

伊東 正吾

豚コレラ発生で激動した昨年を思い返すと、2020年(令和2年)がより平穏で安定した年になることを、心から願うところであります。

改めまして、明けましておめでとうございます。

今年は、わが国としてはオリンピック イヤーで騒がしい年になりそうですが、私個人としては日本の養豚産業界が堅実で安定成長の年になることを第一に祈念しております。

1. 昨年の私的概観

毎年、自宅がある長野県伊那市(東に南アルプス、西は中央アルプスで挟まれた天竜川沿いに位置)で年を越し、零下5～10℃の寒中で初日の出を迎えるのが私の常であり、南アルプス北部の名峰である東駒ヶ岳(甲斐駒ヶ岳)と仙丈ヶ岳(写真1)の間にある北澤峠付近から立ち上る荘厳な初日の出を拝し

て年が明けます。特に昨年は近年で初めて、雲一つない状況下で神々しい初日の出を見ることができ(写真2)、大いなる希望をいただきました。ところが、私の実際は真逆の状態を迎え、年明け早々一時的に倒れたことを皮切りに、2月、4～5月、7月には左膝に激痛が発現して立ち歩き困難な状態に陥りました。特に7月には左膝から爪先までの左下腿部全体が象の足のように腫脹し激痛を伴い、精密検査で「ふくらはぎ(腓腹筋)」全体の血腫が判明し、その回復には8月半ばまで要しました。深部静脈塞栓症などを想定して血管造影もしましたが原因は不明で、根本的な治療はできませんでした。更に不調は併発し、2月頃から右肩痛が強くなったため検査すると「右肩腱板断裂」と診断され、8月末に専門医のいる大学病院で手術することになりました。お陰様で断裂状態は解消できましたが、右腕のリハビリ訓練は今



写真1 南アルプス北部の3000m級の名峰・東駒ヶ岳と仙丈ヶ岳
伊那市の天竜川東側、河岸段丘の最上部の広大な台地から望む積雪期の山々

も継続している状況です。また、手術に向けた血液検査で腎臓機能が低下していることが発覚し、退院後の現在は紹介された病院の腎臓内科における治療も始まってしまい、結局現時点では3つの病院に通院する羽目となり、日常生活が病院通い主体となってしまいました。

あの極寒の冷氣の中で拝した近年稀な美しい初日の出は何だったのだろうと、ついつい愚痴りたくなる一年を送っていました（毒を一気に吐き出したと慰めてはいますが・・・）。

おまけに、退職した身の私ですから直接的関わりはなかった豚コレラ発生関連では、政治家と農水省の判断と対応の不十分さのため、多くの農場や関係者に大きな苦勞を負わせてしまい、極めて口惜しい思いをしておりました。ただ一点だけ、長野県のある市の市長から緊急要請があり、私は右肩手術直前の時期でしたので身体への負荷は若干過大でしたが、疾病防除とは異なる面から農場のサポートに関わったことは唯一の収穫でした。安定した生産活動の持続には、生産者だけでなく地域行政などの意識が重要であることを再認識させられました。

今後、アフリカ豚コレラの侵入阻止課題が現実味を帯びてきましたので、多方面からの対策を着実に実施し、わが国の養豚産業を関係者がONE TEAMとなり守っていききたいものです。

2. 国民生活と遊離した政治状況

激動の幕開けとなった令和の時代ですが、日本社

会の現状を俯瞰すると多くの問題点が黒い霧のように立ち込め、国全体に閉塞感とやるせなさが充満しているように思えます。残念ながら、その元凶にあるものは最近の政治環境のように見えます。

今さら根本的な次元の話をしたくはありませんが、新年を迎えて今後を展望し、混沌とした現状から脱却するために、そもそも政治とはどうあるべきで、何を目的とするべきものなのか、という点について再確認したいと思います。

基本的に、「政治とは、社会における秩序の形成と解体をめぐる、人が他者に対して、また他者と共に行う営み」（広辞苑第五版）と定義されています。より簡略化すれば、『社会秩序を正しく運営する行為』と整理できます。従って、「政治家とは、社会秩序を正しく運営する資質を有する者であり、有権者から支持を受けた者」であることが必須条件となります。比喩的に言うならば、「政治家とは政治的手腕があり、駆け引きのうまい人」（広辞苑）です。現状を正しく検証する際には、ここがポイントになると思います。

もう少し踏み込むと、近年の社会において一番問題であるのは「えせ政治家」の急増だと思います。「えせ：似非」とは、まさしく似てはいるが本物ではないことであり、「えせ政治家」とは即ち「政治屋」（税金で私腹を肥やすことを恥とも思わない厚顔無恥で盗人猛々しい人種）であり、がん細胞と同じく、早期に切除・根治しなければ社会が崩壊する可能性が高いと考えます。混沌として閉塞感の強い現在の日本（国政も地方も）が今後健全に発展し、精一杯頑



写真2 2019年1月1日7時25分に初日の出

近年では稀なほど晴れ上がり雲がほとんど認められない快晴状態で、地上では零下10℃近くかと推測されるほど肌を突き刺すような厳しい寒さの中で初日の出が荘厳な姿を見せた。

張って生活している全国民が希望を持てる国にするためには、似非ではない本物の政治家を選挙民が選ぶことから始まると感じています。

本物を選ぶことは結構難しいことですが、要は選挙民が私利私欲に流されず、社会の本来あるべく姿を想定して人物を評価し、候補者の言動などから問題のある人物は確実に除外する作業から始めるしかないと思います。

時代が平成から令和へ移行する歴史の大きな節目を迎え、伝統と格式に基づいた皇室関連行事と、平和憲法の下で象徴としての在り方を追求されてきた上皇皇太後の思いを引き継がれる天皇皇后の真摯な姿勢に接し、多くの日本国民は誇らしさを実感したと思います。

一方、同時期に露呈した「桜を見る会」のあまりにも独りよがり（自分勝手）、かつ立場をわきまえない税金の非常識な浪費実態は極めて嘆かわしく、問題はこのイベントだけに留まらないことは明確です。国として信じられないほどの負債をかかえた現状で、早急にその解消に邁進する義務が国政に関わる政治家にはあるはずです。また、自然災害などで多くの労苦に遭遇しながら懸命に生活している国民を可及的速やかに救済し、早期の復興に尽力することこそ全ての政治家が奮闘するべきであり、その活動を可能にするために税金を支出し、彼等の活動を保証しているはずです。

大きな思い違いをしていることに気付かず浮かれ切っている国政の最高責任者夫妻を始め、保身などを優先して付度に走る取り巻き集団（政治も官僚も）の様子は、最近の事件を思い起こすと「森友問題」、「加計問題」、「自衛隊海外派遣報告書書き換え問題」、「英語入試問題」、そして「桜を見る会」に関連した予算支出・出席者・政治資金規正法などの諸問題から、共通した問題点が浮き彫りにされています。

「臭い物には蓋」を最良の手段と誤信し、各種追及に「知らぬ、存ぜぬ。記録も記憶もない。」などと各種隠蔽工作に終始して説明責任を逃げ回り、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」を金科玉条のように信じて国民を平然と愚弄するような不逞の輩達は、すべからず早々に排除すべきです。勿論、そのための手段はテロ的行為・暴力行為ではなく、正しいルールと社

会制度の中で着実に実施しなければなりません。

3. 再認識すべき3つの責務

日本が平和で在り続けるために、また、国民の安寧を維持するためには何をすべきかという観点から、新年に際して考えてみると、結局は特別なことをするのではなく、基本を再認識し、「保身と私利私欲に走らず、地域・国・世界の共生を常に思い活動する」ことに尽きるのではないかと、という結論に達します。

本誌第106号（昨年9月）の記述と重複する部分がありますが、政治家、官僚など公務員、及び国民が以下のような意識を常に持ち活動することが重要ではないかと考えます。

①政治家の責務：社会秩序を守り、自身の利益や名誉を優先することなく、国家や地域の発展のために誠心誠意活動することが当然の責務と考えます。日本国憲法に「主権在民」が明記されている以上、この点を深く自覚し、更に「政治家は言葉と行動が命」であるとも言えることから、常に真摯な言動に努める責任があります。

②官僚・公務員の責務：パブリックサーバントとしての立場を忘れず、業務推進の上では常に国民優先と国家（地域）への貢献度を判断基準とし、第一義的に基本的には閣僚や政治家など権力者側に立った付度をしないことは当然の責務であり、その存在価値の原点でもあると思います。

③一般市民の責務：投票権を有する選挙民としての自覚と責任を持ち、地域の利益は当然考慮するものの、その中での個人の利益や義理人情を優先して投票することは厳に戒めることが正しい判断の基となるのではないのでしょうか。また、地域選出で支援していたとしても、問題発言や問題行動が目立つ議員はリコールまたは落選させることも選挙民の責務であると考えます。

4. 最後に

写真にあるような、全てを包み込む雄大で寛容でありながら厳しさを合わせ持つ自然環境と、慈愛と力強さに溢れた陽（ひ）の力を存分に受け、安心と幸福感に満たされた健やかな一年になることを、心から祈ります。

事務局からのお知らせ

ピッグファーマーミングハンドブックのご案内

この度、日本養豚事業協同組合では、海外技能実習生に日本の養豚場で楽しく働いてもらうための養豚便利冊子「ピッグファーマーミングハンドブック」を作成いたしました。

日本の養豚場における検疫・防災のルールを図やイラストを用いて分かりやすく説明すると同時に、養豚管理の用語集や管理のポイントの解説なども記載しておりますので、組合員の皆様が海外技能実習生を雇用する際の教育ツールとしてもご利用いただけるようになっています。また、飼養管理に関するだけでなく、日常生活に必要な単語集も記載し、日本語も併記しておりますので、海外技能実習生と日本人従業員とのコミュニケーションツールとしてもご利用いただけます。

昨今の日本の養豚場における海外技能実習生はベトナム人が多く、次いで中国人やミャンマー人が多いと思われることから、ベトナム語版、中国語版、英語版を作成し、1月にはミャンマー語版も完成予定です。

組合員の皆様には、ご希望に応じて合計10部まで別途無料で配布しております。（無償配布分の送付は発送先1か所で1回限りとなります。注文書を同封しておりますが、既に注文済みの方はご容赦ください。）それ以上の部数をご希望の組合員、そして組合員以外の方々には1冊330円（税・送料込・発送先ごと最低10部）で販売いたします。海外技能実習生だけではなく日本人従業員にも配布いただき、是非皆さんでご利用いただければと思います。どなたでも購入可能ですので、周りの方々にもお声かけください。

ご希望の方は添付の注文書にご記入のうえ、豚事協事務局まで送付してください。申込書受領後請求書を送付いたしますので、請求書に記載の振込先口座に送金手続きをお願いいたします。入金確認後、ご指定の送付先に発送いたします。在庫がなくなり次第終了となりますので、ご希望の方はお早めにご注文をお願い致します。



ベトナム語版



中国語版



英語版

豚事協共同購入事業資材のご案内

車両積載型消毒液散布装置「PreCube（プレキューブ）」

本体価格：60,000円 ※税・送料別

仕 様：本体：タンク・ポンプ・噴霧ノズル

タンク（ポリエチレン・リサイクル品・洗浄済み）：1000L

枠：亜鉛メッキ加工

排水ドレイン付：JIS50A内ネジ

充電式バッテリーもしくはシガーライター電源

※12V100W水中ポンプ：連続2時間稼働

車両積載散布用延長ホース（25mm L=2.5m）

※軽トラック～2tトラックまで対応可能

製 造 国：日本



●●● 第19回通常総会および20周年記念祝賀会開催のお知らせ ●●●

第19回通常総会および20周年記念祝賀会を下記の要領にて開催致します。詳細は別途ご案内申し上げますが、多くの組合員の方々にご参加いただきたくお願い申し上げます。

開催日時 令和2年2月28日（金） 午後1時30分～

開催場所 大手町サンケイプラザ

住所：東京都千代田区大手町1-7-2 TEL03-3273-2230

交通：丸の内線・半蔵門線・千代田線・東西線・都営三田線

「大手町駅」A4・E1出口直結

JR「東京駅 丸の内」北口より徒歩7分

議 案：◆第19期事業報告、決算（案）の承認

◆理事、監事任期満了に伴う改選

◆第20期事業計画案の承認

◆経費の賦課徴収方法の決定

なお、総会終了後、20周年記念祝賀会を行います。

アクセス：



編集後記

新年あけましておめでとうございます。昨年の新年号では（どうかCSFが早期に収束に向かいますように）との願いを込めて「亥年＝豚年＝養豚業界の年！みんなで盛り上げていきましょう」と書きましたが、過ぎ去ってみればCFSに振り回された年となってしまいました。2020年は十二支の始まりの年でもある子年。野生イノシシ対策としての経口ワクチンがしっかり機能し、CFSに対する組合員の皆様の不安が少しずつでも払拭され、安心して養豚生産に取り掛かれる始まりの年になって欲しいと思います。CFSとの戦いはまだまだ続きますが、点が線となり面となって最終的には国家防疫に繋がると信じて、個々が出来る限りの防疫対策を実施しましょう。そしてASFの日本への侵入を阻止し、オリンピックイヤーでもある2020年をみんなで乗り切ろうではありませんか！

豚事協は2019年12月1日をもちまして、設立20周年を迎えました。これもひとえに組合員の皆様はじめ、関係者の方々の暖かいご支援があったること、改めてお礼申し上げます。つきましては第19回通常総会と同日に20周年記念祝賀会を開催することになりました。総会案内と合わせて、詳細は別途郵送にてご案内致しますので、予め日程調整をお願い致します。何かと大変な時期ではありますが、業界内の明るい話題と捉えていただき、多くの関係者の方々にご出席いただきたくお願い申し上げます。（東）